



三重県産木材で
家を建てた人たち

実例集
Vol.3

10
例





限りある地下資源と違って、植物である木は太陽の光と雨水、大地の養分で持続可能な資源です。ただし、それには植林・除草・枝打ち・間伐といった人の手による管理が必要です。放置された山林は、豪雨で土砂崩れを起こすなど各地で災害を招いています。地域環境を守るため、山林が健康的に維持されていく必要があります。

守る

伝える



「地産地消」というスローガンがあります。地域の産物を、なるべく地域で消費しようというもの。本来、これが暮らし（衣食住）の基本でした。物を遠くから運んでくるよりも、環境負荷がかからず地場産業が守られ、地域で経済が循環するからです。日本は、国土の三分の二を森林が覆う緑の列島。木の家に住み、木の家具を使って暮らしてきました。木にまつわる産業や文化を守り伝えるためにも近くの山の木で家を建てましょう。

近くの山の木で

木の家
いっしょに
家を建てるなら



癒す

木に包まれた空間に身を置くと誰もがほっとくつろぎますよね。自然な見た目、香りや手触りの良さもさることながら木は、音や光を適度に吸収して優しく反射するので、目や耳が疲れません。さらに、空気層の保温・断熱効果から夏涼しく、冬は暖かいのです。コンクリートの箱、プラスチックの箱、木の箱…生き物にもっとも居心地が良さそうなのはどの箱だと思いますか。

育む



木は製材後も生きて呼吸しています。空気が乾燥すると水分を放出し湿気が多いときは吸収してくれるのです。だから、梅雨時でもジメジメしません。暖房の季節は結露を防いでアトピーの原因といわれるダニやカビの発生を抑えてくれます。また、無垢の木には石油系接着剤など有害物質を一切含みませんからシックハウスとは無縁の健康的な暮らしが約束されます。

1

紀北町Iさん邸の場合

若き棟梁が尾鷲ヒノキを手刻み 地産地消のお手本のような家

広い玄関で、二層になったヒノキの上がり框が存在感を放っている。

現しの柱や階段、リビングや書斎の床や壁、建具類にもヒノキが使われ、爽やかな香りで屋内が満たされている。外壁や内装材で隠れてはいるものの、構造材もほとんどがヒノキという。

「家を建てるなら、尾鷲ヒノキをできるだけ多く」が施主の希望だった。見た目や手触り、木の調湿作用などを期待するのみでなく、自邸の建設が地場産業の振興につながれば、と思つてのことだ。

請け負つたのは、地域の林業、製材業者らで組織する「東紀州・尾鷲ひのきの会」。木材の供給を前提とした家づくりネットワークで、同会所属の一級建築士が設計し、地元の若き棟梁が施工した。

建材は、工場でのプレカットではなく、大工による手刻み。手間はかかるが、一本ずつ木の個性を見て、最も効果的に刻み配することができる。

「プレカットは安くて早いけど、柱などの面が表に出るかかわからないし、機械特有の削り跡も残る。人間の手が、機械に負けてなんかいいられない」

熊野灘に面した入江の畔にIさん邸は建つ。

そこから見上げる山で伐り出されたヒノキが、麓で製材され、地域の人々によって家へと姿を変えた。

地産地消のお手本のような家である。



ヒノキ板のフロアは、湿気の多い夏場でもベタつかず、冬は空気を含んで暖かい。



写真上右／尾鷲ヒノキの上がり框が美しい玄関。

写真上中／ご主人の書斎のみ、床から天井までの内壁もすべてヒノキ張り。

写真上左／リビングと同様、腰壁のみをヒノキ張りとした和室。

写真左／階段もヒノキ製。さらっとしているので、素足が心地よい。

●設計・納材／東紀州・尾鷲ひのきの会 TEL.0597・32・0001

<http://www.re-forest.com/owase-hinoki/>

施工／新玉建築 TEL.0597・32・0118

●建築坪単価 約60万円

2

松阪市 Mさん邸の場合

美杉産の葉枯らし材で建てた 伝統とモダンが同居する二世帯住宅

「家は、その地域にある材料で、その地域に伝わる工法で、その地域の人々によって建てられるべき」と提唱する建築家は、山元から川下にいたる家づくりネットワーク「三重の木で家をつくる会」を組織し、自然素材と伝統工法による家づくりを推進してきた。「工場生産の建材を組むのではなく、希望通りの設計と、施工監理を任せられる方に頼みたかった」「保育園で、アトピーや喘息などシックハウスの話を聞いたから、木の家がいいなと思ったんです」

施主夫妻は、同会が津に建てた家をひと目見て気に入ったという。さらに、同会主催の森林見学会に、同居する両親とともに参加し、自邸に使われる木のふるさとを目の当たりにした二人は、新居への愛着を一層募らせることとなった。

スギと漆喰を交互に用いた外壁、方形のデザインはモダンそのものだが、通り土間を伝って屋内に入ると、なぜか懐かしさを感じる。

内装の主役も、やはりスギと漆喰だ。スギは美杉産の葉枯らし材で、粘りがあり、色つやも美しい。

中庭に面してL字型に開口し、風が自在に駆けめぐるレイアウトは爽快そのもの。一階に濡れ縁、二階にはリビングとつながるウッドテラスが設けられ、半屋外が満喫できる。風や光が、住まいの大切な要素と考える建築家ならではの気配りが活かされている。



中庭を取り囲むL字型の配置は、開放的かつプライバシーも守られる。



写真右／親世帯が暮らす一階リビング。掃き出し窓の外には、濡れ縁が巡らされている。

写真中／スギと漆喰を交互に配した外観はモダンそのもの。

写真左／窓を開放すれば広いウッドテラスと一体になる開放的な二階リビングダイニング。夏場の夕涼みには最適だろう。

●設計・施工／三重の木で家をつくる会 TEL.059・351・8301 (I設計室内)
http://www.mieno-ki.com

◎建築坪単価 約65万円(設計・監理除く)

3

鈴鹿市 Tさん邸の場合

国産の無垢材を適材適所に用いて 海を眺める癒しの空間を実現

海岸沿いに建つTさん邸のリビングからは、松林越しに伊勢湾が光る。

かねてから木や家に高い関心を抱いていたオーナーは、木の家づくりに定評のある建築家と、職人気質の棟梁とともに、一年ほどかけて図面を見ながら話し合いを重ねたという。

二階は玄関とガレージ、堤防レベルより上の二階にリビングやキッチン、寝室、風呂などが配されている。

一階にはほとんど壁のない構造上、躯体こそ鉄骨にしたものの、外装材にはスギ、梁や柱にはヒノキ、床にはカバザクラと、壁、天井、階段にいたるまで、すべて近くの山で伐採された木を中心に、国産の無垢材ばかりが十数種、適材適所に用いられている。

さらに、この家を居心地良くさせているのは、板倉造りと呼ばれる伝統工法。厚みのある壁材を組んであるため、耐震性や断熱性に優れ、木が温度や湿度をコントロールしてくれる。

ゆえに湿気の多い立地ながら、木が天然のエアコンとなつて、夏は潮風と天井のファンでクーラー要らず。冬は温水式床暖房で寒さ知らずだ。

「この家に住んでから、初めて家が癒しの空間だと感じるようになりましたね」

外食中心だった食生活も一変し、今では自身で料理を楽しむなど、生活がスローに変わったという。



ロフトからリビングを望む。天井が高く開放的な空間に、大工作の長テーブルがどんと据えられている。



写真右上／お気に入りの寝室。天井から壁、床、テーブル、ベッドまで、すべて天然木の手づくりだ。

写真右下／一階をスギ板張り、二階を塗り壁とした外装。構造材は鉄筋だ。屋根には太陽光発電システムを搭載する。

写真左二点／海を眺める浴室。洗面所やトイレもスギ板張りだ。

●施工／宮本建築 TEL.059・397・5210

<http://www.cty-net.ne.jp/mmk/m/>

●建築坪単価 約65万円(設計・監理除く)



4

四日市市 Mさん邸の場合

家族の健康のために 努力と工夫で実現した無垢スギの家

青空を背景に、白と木の外壁が美しいコントラストを見せている。Mさん邸は、玄関に二歩足を踏み入れると、そこから総無垢材の世界が広がる。

構造材やドアの縁にはヒノキを用い、それ以外は床も壁も天井も、居室から階段、トイレ、物入れにいたるまで、すべて県産スギが張られているのだ。

リビングに腰を下ろすと、あまりに暖かいので、思わず「床暖房ですか」と訊ねると、「いえ、ファンヒーター一台ですよ」との答え。一年で最も寒い時期というのに、幼い娘さんたちは裸足で走り回っている。

床は四十ミリのスギ板で、内装壁の内側には羊毛の断熱材が使われているから、保温効果が高いのだ。「娘たちの健康のためにも、家を建てるなら無垢の木でと決めてたんです。デザインや間取りよりも、とにかく自然素材を優先させたかった」

何度か住宅展示場や完成見学会に足を運んだオーナーだが、納得できる家には出会えなかった。

そんなとき、三重県木材協同組合連合会が主催する「顔の見える家づくり見学会」を知り、そこで県産材の普及を図る施工者と知り合ったのである。

予算内で総無垢の木の家を実現するため、なるべくシンプルな間取りとし、使えるところはすべて木にすることで工事業種を減らし、手の届くところはオーナー自らが自然塗料を塗ったという。



外は小雪の舞う日でも、ファンヒーター一台でぬくぬく。娘さんたちは素足だ。



写真右／外壁は、一階部分がスギ板、上部はサイディング張りとした。オーナー自らの手で自然塗料を塗れる高さにと考えたため。

写真中／引き戸を開放すればリビングとつながる和室。

写真左／二階の子ども部屋は、娘たちの成長にあわせて仕切ればよいと、あえて隔壁が設けられていない。掃き出し窓の外にはウッドテラス、右側の壁上には小屋裏ロフトが。

●設計・施工／丸栄木材・ヘリテッジホームデザイン TEL.059・222・2240

http://www.hhd.co.jp

●建築坪単価 約45万円



5

伊勢市 Kさん邸の場合

宮川流域の杉がふんだんに 中庭をコの字で囲む高台の隠れ家

「どこにいても家族の気配を感じる家にしたかったんです」
Kさん邸は、伊勢市街を一望する高台の隠れ家。中庭をはさんで南に仕事場、北に居住スペースがあり、それらを幅広の廊下がつなぐ、コの字型のレイアウトだ。しかし、二階への吹き抜けと中庭のおかげで、お互いの気配をさりげなく察することができる。建築家は「みえ木造塾」の塾長を務め、地域材による家づくりに積極的な人物。当然この家にも、柱や梁など構造材には宮川流域の杉が用いられた。七寸角の大黒柱は、建築家と夫婦が宮川森林組合へ赴き、選ばせてもらったもの。リビングにどっしりとたたずんでいる。

外壁の漆喰、内壁の珪藻土を塗ったのは、地元左官職人。カウンターや洗面所の収納棚など、造りつけの木製家具も、地元の家具工房であつらえられた。建具も工務店も、すべて信頼を寄せる近場の業者ばかりなので、メンテナンスの点でも安心だ。

「合板を極力使用せず、断熱材も化学繊維でなく羊毛製に。床は傷の付きにくいものにと、カエデの無垢板にしてもりました。冬は暖かいし、夏は湿度を吸収するためか涼しくて、二年中快適です」

見晴らし抜群の居心地いい家には、しょっちゅう友人が遊びに来るといふ。



コの字型の建物に守られる、広いウッドデッキの庭。中央のヤマボウシは成長と共に涼しい木陰をつくる。



リビングダイニングは、キッチンから家族の様子が見える造り。左の太い大黒柱は7寸角で存在感抜群。



写真右／二階は子ども部屋と寝室、収納部屋をぐるりと周回できる間取りになっている。階段上がつてすぐのスペースは、家族みんなの小さな書斎として活用。

写真左／外壁は、漆喰と焼スギ板を組み合わせた和風モダン。焼スギ板は、高いデザイン性と、メンテナンスが楽なこと採用された。

- 設計/shu建築設計事務所 TEL.0596・52・6400
- 施工/岩佐工務店 TEL.0599・26・2510
- 建築坪単価 約70万円(設計・監理除く)



6

大台町 Tさん邸の場合

生まれ育った土地の木の家で 自然と一体化した暮らしを満喫

「自分が生まれ育った村の木で家を建てよう。イメージは『小屋のような家』だ。明るくて風通しが良く、自然と一体化した暮らしができる家」

故郷を愛する施主の思いは、光と風をテーマとする建築家に託され、その思い通り宮川産のスギで形になった。

リビングダイニングには子どもたちのスペースであるロフトが設けられ、子ども部屋を隔離しないという施主の希望で壁がない。そのため住空間が一階からロフトまでひとつにつながり、開放感あふれる木の空間が実現した。

天井を張らない真壁造りが、屋根の野路板やロフトの床板、梁や柱など家の構造体を見せることで、無垢材の温かな質感を部屋いっぱいに漂わせている。その木肌を彩るのは、大きな窓から取り込んだ空の青、木々の緑、そして眩しいほどの光。スギ板張りの浴室で掃き出し窓を開放すれば、まさに自然を浴する至福の時となる。

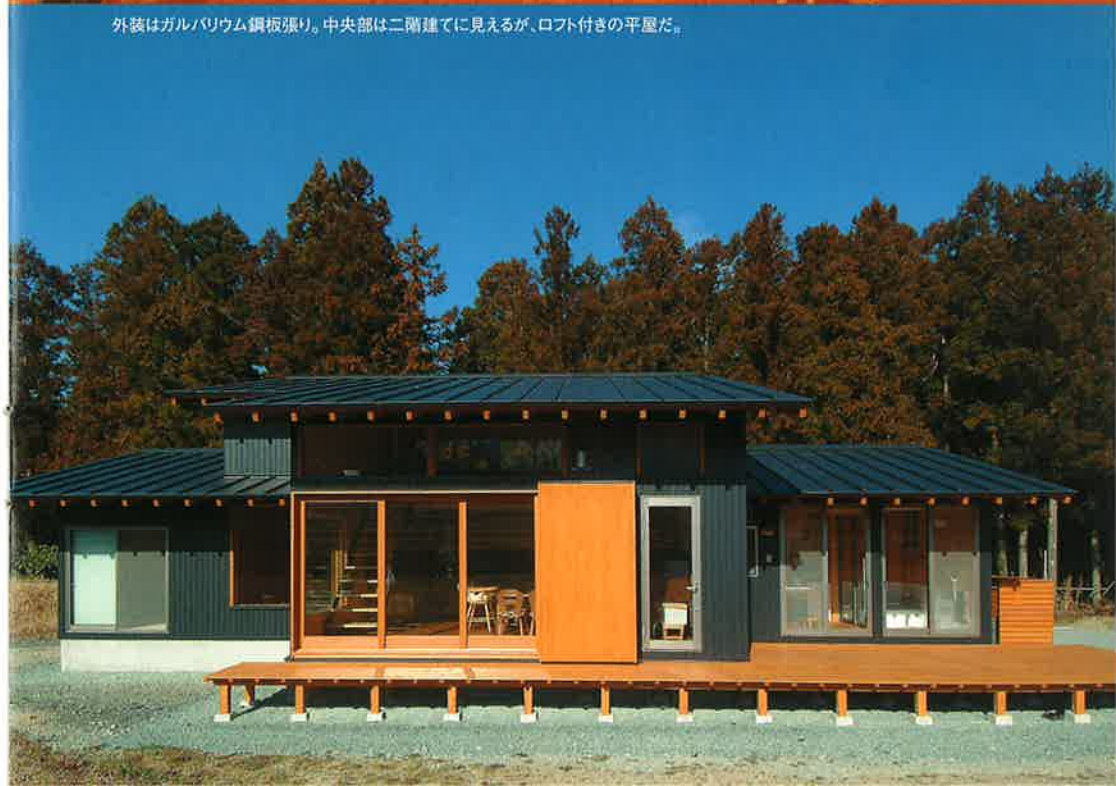
「夏でも床がサラサラしていて本当に気持ちがいいんですよ。スギは傷付きやすいですが、それもまた味わいになります。軟らかいので子どもたちの足への負担も少ないですね」

木の家は快適だからだにやさしい。それが体感できるのは、住む人にだけ与えられた特権なのだ。



露出型のスチール階段が風通しの良さを演出。部屋が仕切られていないのがよくわかる。

外装はガルバリウム鋼板張り。中央部は二階建てに見えるが、ロフト付きの平屋だ。



写真右上／子ども部屋に使われるロフトスペース。一切隔壁はないが、ポリカーボネートの引き込み式戸が設置されている。

写真右下／ロフトから見下ろすリビング。日中は陽光がたっぷり降り注ぎ、夜は灯油温水式床暖房が暖める。

写真左上／自然と一体になる浴室。湯上がりはウッドデッキで。

◎設計／建築デザイン研究所 TEL.059・229・4414
<http://www.alles.or.jp/mura/>
 施工／松島工務店 TEL.0598・77・2076
 ◎建築坪単価 約57万円(設計・監理除く)



名張市 Tさん邸の場合

製材から設計・施工まで 自林の杉で建てた家

杉は比較的軟らかい木材のため、構造材に用いる際はある程度の太さが必要になる。だからこの柱は誰かに威容を誇るためのものではない。この家にあるべき生来の太さだ。

杉の無垢材が広がるリビングを見渡すと、柱が高い天井へと力強く伸び、ポリウムのある梁と視線を導く。足下のフローリングは、厚さ三十ミリのスギ材。床暖房かと訪問者を惑わせるほどに暖かい。

国産スギ独特の上品さに満ちた空間は、リビング隣の和室や広大なウッドデッキ、二階の寝室、子ども部屋へと途切れることなく広がっていく。壁面にも腰板が張られているが、その上は調湿効果に優れた珪藻土の塗り壁。あえて全面を木材としないことで、室内に明るさと広がり生まれた。

設計者が思い描いたのは、人と環境にやさしい地元材の家が、すべての人に身近なものとなる未来。地域に自らの山林を持ち、製材から設計・施工まで一貫して行える工務店だからこそ描ける夢だ。

山から伐り出した木が家を形づくるまで、一切の中間コストを必要としないので、贅沢に地元材を使いながらも価格を抑えることができた。

山林と我々の距離を縮めて、木の住まいを身近なものにしてくれる。そんな喜ばしい未来がここに建っている。



杉を豊富に使用したリビング。木材と土壁のバランスで空間に広がりを持たせている。



写真右／二階廊下。ドアもスギ製として床や天井と調和させている。

写真中／塗り壁の外装を、杉のアクセントで引き締めて。

写真左／階段の踏み板にも杉が使われている。

●設計・施工／辻本ウッドワーク TEL.0595・63・3121

●建築坪単価 約50万円(設計・監理除く)



8

紀北町 Sさん邸の場合

ふるさとの産業を活性化させるべく 自ら基本設計した終の住処

紀北町に生まれ育ち、都会で長年働いた施主が、ふるさとに終の住処を建てようと思ったとき、目に付いたのは、すっかり様変わりした町並みだった。「木の里なのに、それを発信できる家が少ない。このままでは、地場産業が衰退してしまうばかり」そこで、町内のスギとヒノキだけを使った、外部にもPRできる家を自らが基本設計したのである。

構造材にヒノキを、内外装材にスギを用いた平屋は、懐かしい木造校舎のよう。冬の隙間風を防ぐため、窓こそペアガラスのサッシだが、内側には木製建具がはめられており、木二色の空間が生まれる。造りつけの家具や建具類は、壁板が横張りなのに對して、縦目を用いて調和と差別化を図っている。

天井高をかせぐため、梁を現しているが、これは乾燥により木が暴れることを見越して、ボルトの増し締めがしやすいようにと考えた結果でもある。「熊野古道沿いにあるので、旅人も気軽に立ち寄っていただけるよう、開放的な造りにしました」

手づくりの庭には、「以前ここに建っていた家の記憶を消したくない」と、古い瓦や石が配されている。先祖代々の屋号を軒先に掲げ、テレビもエアコンもマイカーもないスローな暮らしを楽しむオーナー。そこには、ノスタルジックな郷土愛を超えた、多くの示唆が含まれている。



ヒノキの床、スギの壁に囲まれたダイニング。壁は横張り、建具は縦張り、目を変えることで調和と差別化が図られている。



写真右／熊野古道に面したSさん邸。訪ねれば、気軽に木の家のことを教えてくれる。
写真中／バリアフリーのトイレも総スギ張り。洗面所や浴室の壁にもスギ板が用いられている。
写真左／玄関の左には、板張り、畳敷きの二間がつづき、大人数の会合や来客にも対応。
◎基本設計／柴田洋日 TEL.0597・35・0790
施工／小西建築 TEL.05974・7・2489
◎建築坪単価 約53万円(建具類込)



いなべ市 Oさん邸の場合（移築再生）

築150年余の旧旅籠が 若い家族と新たな思い出を刻む

風の抜ける田の字の間取り。名もなき職人が彫った見事な欄間。黒光りするマツの縁側。懐かしくて新しいこの家は、築百五十年余の再生民家である。かつては旅籠で、旧オーナーが都会へ働きに出るまでは住まいとして使われていたが、道路拡幅のために立ち退きを要請され、案じていたところ、「NPO日本民家再生リサイクル協会」の口利きで、現オーナーとの出会いに恵まれた。

「太くて頼もしい地元材の梁や柱。豈も今では珍しいワラ床と、利用できる自然素材がたくさんあったので、損傷の著しい部分以外はなるべく手を加えず再生しました。幼い子どもたちは、大切なものは何か、肌で感じながら成長してくれることでしょ？」

設計者の目線は、小さな子を三人も抱える若い家族の将来に向けられていたのだ。

ガルバリウムの屋根に白壁、背の高さまでスギ板を張った外観は今風で、とても再生建築には見えない。玄関をくぐると、最も手を加えたという、真新しいダイニングキッチンについて目が吸い寄せられる。床に無垢のスギ板を張り、収納棚も同じくスギであったらえたシンプルな空間は、これから使い込まれるほどに味わいを増していくことだろう。

古い木材と新しい木材がうまく同居することによって、新たな家族の思い出がまた刻まれていく。



玄関から室内が一望できる。無垢のスギ板を張ったキッチンは、冬場も足下が暖かい。



曲がった木は曲がったまま使う。適材適所の知恵がここここに。

二階の子ども部屋に至る階段。時を経るほど、つやめくのは木材ならではの。



写真右／もとは木造瓦ぶぎの民家だったのを、ガルバリウムの屋根でモダンな姿に。
写真左／天井まで吹き抜けの空間全体を暖めるのは、薪ストーブ。積雪の多い地域なので大いに活躍している。田の字の間取りは、夏には障子を開放してワンルームに変わり。

●設計・施工／民家舎 TEL.0594・24・2234 <http://www.minkasha.com>
●建築坪単価 約53万円



10

松阪市 Kさん邸の場合（リフォーム）

見事なマツの梁をあらわにした 床暖房のあるLDK

四十年前、大工の父が建てたというKさんの生家は、寒くて暗い典型的な日本の古い家だ。子どもが成長するにつれ、それまでの住まいが手狭になったので、生家の一部をリフォームして移り住んだ。

「人がたくさん集まれる、あたたかくて楽しい家に」ともに建築家であるオーナー夫妻は、めつたに使用しない応接間を改装し、二十六畳ほどのLDKを実現するプランを固めた。

格子戸をくぐると、簾天井に土壁、畳の間；と料亭のようなウエルカムスペースに、まず驚かされる。

天井を取り払い、太いマツの梁を現したLDKは、白壁に古色をほどこした床や柱がしっとり落ち着いた。床は、美杉産の厚いスギ板に柿洪とべんがらをほどこしたものを、炬を切ったマツの堀座卓は、来客があつても余裕の広さで、家族みんなのお気に入り。そんな和風の空間で、唯一システムキッチンの周辺だけがモダンなエッセンスを放っている。

寒さ対策には、自身の経験から床暖房を選んだ。暖かさは、靴下を履いたままでも実感できる。

「リフォームは新築より手間のかかるケースが少なくありません。が、先人の技や現代では得がたい材料など、職人としては見過ごせないことばかりです」。シンプルな木の家の良さは、住み手の工夫次第で何代にも受け継ぐこと。この家は好例といえよう。



写真右／左官仕上げの土壁と土間が印象的な玄関。上がり框は、もとの家にあったものをカンナ掛けて再利用した。
写真左／古い和箆が収まる座卓の間。座卓は掘りごたつ式となっており、大人数の来客にも対応できる。壁面の三つの窓は、採光用兼デザインのポイントにもなっている。

- 設計／プラス設計室 TEL.0598・42・5363
<http://www.za.ztv.ne.jp/plus>
- 施工／山口建設 TEL.0596・52・2289
- 建築坪単価 約50万円（設計・監理除く）



床暖房が設置されたリビング。マツの梁は、もともとあった材と新材をうまく組み合わせた。



やさしさとゆたかさ。
三重の木はいつもとなりに。

三重県木材PR委員会

三重県津市桜橋1丁目104

TEL.059-228-4715 FAX.059-226-0679

<http://www.inetmie.or.jp/~mokuren/>

(注)本書記載の建築坪単価は、あくまでも目安です。延べ床面積、地盤の状況、設備等によって異なります。また、設計・監理料を含むものと含まないものがあります。

三重県産木材を使う住まいのご相談は